論説

明治十年代後半における帝政派の政治活動の一考察

――明倫会と大分斯文学会――

櫻井良樹

はじめに

本稿は野田秋生氏の最近の業績[1]をふまえながら、大分県の帝政党系政派である明倫会をめぐる新たな史料を示すとともに、人脈的にそれを引き継いだ大分斯文学会を検討することによって、明治十六年から二十年にかけての地方政治界の様相の一面を示すことを目的としている。その際、特に漢文学会・漢文学校と帝政派との関係について注目した。[2]

一、明倫会の成立

明治十四年の政変後、政界は明治二十三年の国会開設に向けて新たな政治段階に入り、自由党や立憲改進党が結成され、自由民権運動に批判的な勢力は立憲帝政党を組織した。立憲帝政党は、熊本の紫溟会や高知の高陽立憲政党などを各地の支部とし、十五年十月十二日には京都において全国の帝政党系政派の大懇親会を行なうなど、自由党・立憲改進党に対して鋭く対立し運動を活発化させて行った。[3]

大分県においても自由民権運動[4]に対抗する運動が起こり、熊本の紫溟会の働きかけもあって、明治十五年ごろまでに、後藤

田鶴雄の回天社や毛利空桑の天壌社などの帝政党系政社が結成され、十五年十月に京都で開かれた大懇親会には後藤田鶴雄・中川濤太郎・橘秀登・遠近武則らを含む大分県人十四名が出席している。[5]

明治十六年に入ると豊州立憲改進党の設立に対抗して、これらの数社を結集した帝政党系の政党が大分でも組織されることになる。従来は、この政党が豊州会であると捉えられていたが、野田氏はこれが明倫会であることを明らかにした。[6]

明倫会は明治十六年五月十七日に組織会が持たれ、五月二十三日に設立の届けが出されている。[7] 会長は豊前鶴崎の国学者毛利空桑(毛利到)であり、[8] 後藤田鶴雄が幹事となり、[9]『大分新報』を機関紙とした。[10] 慈正寺で開かれた組織会には小川弘蔵・中川濤太郎・橘秀登・平塚恰・後藤田鶴雄らを含む三十七名が出席し、名簿に記載されている会員数は大分県の各郡に亙って約三百余名であった。[11] 野田氏は、その「明倫会趣意書」の主要部分を紹介しており、紫溟会の趣意書と比較して、道徳的教化活動を重視している点に注目している。[12]

二、明倫会と明倫校

明治十六年五月に設立された明倫会は、その下部教育機関として学校経営を考え、「私立明倫校規則」[13]を起草していた。「毛利空桑文書」の中にもこれに関する記述がある。それには、「明治十五六年ノ交、勤王愛国ヲ主義トセルノ士平塚恰等ヲ指揮シテ明倫会ヲ興サシム。先人ヲ推シテ渠師トシ会長トナシ、事皆ナ其指揮ヲ待ツ。蓋此会ナル者ハ一ノ学校ヲ設ケ、俊秀ノ少年ヲ教育シテ勤王憂国ニ向ハシムルノ目的ナリ。今日所謂政党ナリ」[14]あるいは「明治十五年、尊王愛国ノ士平塚恰等相謀リテ明倫会ヲ組織ス。先生ヲ仰ヒテ会長ト為ス。蓋此会ハ一学校ヲ初メ、俊秀ノ少年ヲ育ミ尊王愛国ニ向ハシムナリ」[15]と記されており、明倫会は教育機関を設立しようとしていたことが判る。「私立明倫校規則」には、「本校ハ小学ノ科程ヲ卒エシ後、漢学ノ蘊奥ヲ究メント欲スル者ヲ本科トシ、初等師範学科ヲ修メント欲スル者ヲ別科トシ、以テ生徒ヲ教育スル処トス。此ノ生徒タル者ハ、誠ニ以テ身ヲ修メ勤勉以テ志索ヲ遂ケ邦家ノ実益ヲ裨補セン事ヲ要ス」[16]とあり、漢学の学習と師範学校卒

業資格学力検定試験の準備を目的としていた学校であることが記されている。

さて、明倫校という名前の学校が実際に存在したかは不明であるが、そのころ大分に存在していた麗沢館という漢学塾は明倫会に属するものであった。それを示しているのが明治十九年ごろに記された広池千九郎の回顧録である。それを少し引用しておく。(17)

〔明治十六年……亀甲括弧内は筆者の註記、以下同じ〕九月三日、師範学校入学校試業にかかり落第す。〔中略〕よって大分明倫会の設立に係る麗沢館に入る（麗沢館とは速見郡鶴川村士族小川弘蔵含章先生の塾にて、従来大分郡田尻村にありしを、本年本月明倫会の周旋にて当地に移せしなり）。〔中略〕十二月二十日、長池の善行寺（ママ）より東新町来迎寺に麗沢館を移せり。これより大分新聞（ママ）前の編輯長たりし大分郡皆春村後藤田鶴雄、管事となれり。

この記事より、明治十六年九月に小川弘蔵が経営する麗沢館という塾が明倫会の下部教育機関となり、十二月には後藤が管事に就任していることが判る。斡旋されて移った先の来迎寺は大分県会が開かれるほど大きな寺であった。(18) さらに、明倫会組織会の翌日の五月十七日、平塚恰は毛利空桑に向かって「前日〔五月十六日〕同人〔平塚恰〕商議の要領を陳べ小川弘蔵の事に及ぶ、懇嘱あり、其れ国家の為に動かしめよ、不遇米汁に弱ると」(19)と述べ、明倫会組織の件および小川が貧困に苦しんでいることを語り、毛利に小川を活用することを頼んでいる。以上の記述より麗沢館は後藤・平塚らの周旋によって帝政党系の政党である明倫会の下部教育機関となったことが明らかとなる。(20) 小川は平塚・後藤らと共に毛利の門下生であり、天壌社に参加し、明倫会にも会幹として加わっていた。(21)

この明倫会とその下部教育機関としての麗沢館の組み合わせは、政社とその下部機関としての党派教育を行なう学校の組み合せの一例を示すものであり、帝政党系については紫溟会と済々黌との関係や海南立憲政党と海南学校という関係と同様なものと位置づけられよう。(22) 紫溟会を設立した佐々友房は、皇室中心主義の政党を作るとともに、同主義の人物を養成するため教育機関を設立せねばならないとして済々黌を設立し、「正倫理明大義、重廉恥振元気、磨知識進文明」を三綱として掲げ、国

家主義教育を施していた。[23]

三、政党から学会へ

明治十四年前後から活性化していた自由民権運動は、明治十六年ころから停滞期に入り、運動の一部は急進化するとともに自由党は明治十七年十月解党され、大同団結運動が展開され始めるまで衰退期を迎える。これと並行して立憲帝政党も明治十六年八月に解党された。この中央政界における情況の変化は地方政界にも影響を及ぼした。それを興味深く示しているのが熊本県の事例である。

明治十七年三月二十三日、紫溟会は紫溟学会と改名し、政党組織を廃し学術・世務・実業の三つをその主な活動と改めた。改組の理由を説明した「政党を変じて学会となすの理由」には、「吾党の主義漸く世に明かに、吾党と主義を同うするもの日増月加し、曾て吾党の反対に立ち、詭激破壊の論を主張せしもの、或は漸く悔いて其説を改め、或は面を換へ外を装ひ、以て容悦を図るに至る、〔中略〕之を前日に比するに、其盛衰消長果たして如何ぞや、蓋し正義伸びざるなく、邪説竟に久しきに耐ふべからざるを知る」と民権運動衰退についての認識を述べ、「吾党素より政党を欲せざる者なり、唯だ天下詭激の政論滔天の勢あるが為めに、已むを得ざるの義に拠りて已むを得ざるの政党を唱ふ、要は一時彼を制禦するのみ」と従来の政党組織を一時的なものと位置づけ、さらに「政教は一致たり、道徳と法律とは二本にあらず、教は首たり、政之に次ぐ、〔中略〕吾党の信ずる所は、内にしては天倫の秩序を正し、以て人の人たる所以の道を尽し、外にしては天賦の材器を済し、以て各般の事務に当り、〔中略〕先づ我国をして真成なる文明の域に進ましめ、施いて宇内万国に及ぼさんと欲するのみ」と述べて、道徳を広めることをもってその目的とした。[24]紫溟学会の綱領には、道義を講究すること、綱常を扶植すること、治教を輔賛すること、開明を増進することが掲げられていた。[25]この改組された紫溟学会の中心的活動の場となったのが済々黌での教育活動であった。

大分県でも、ほぼ同様な事件が起こっている。佐藤蔵太郎は明治十七・八年ころの大分県下の政治情況を「改進党ノ花ヲ散ラス惨風ハ反対党派ノ紙鳶ヲシテ青空高ク吹キ揚ゲタリ〔中略〕改進党ノ月ヲ掩フ陰雲ハ反対党派ノ瑞気トナリタリ」[26]と記し、改進党の勢いが衰退したのに反比例して帝政派の勢力が強まったことを説明している。明倫会についても次に記すような変化が起こった。『鶴崎市史人物篇』の後藤田鶴雄の項に、「同十六年小川含章・毛利元器等[27]を聘して明倫義塾を経営し、少年の教育に力を尽し、従学するもの三百余人の多きに及んだ。しかし斯文学会というのが設立されたので明倫義塾を廃し、斯文学会の幹事に就いた」[28]と記されている。明倫義塾は明倫会麗沢館のことと考えられるから、斯文学会が設立されるとすぐ麗沢館が廃校されたと解釈できる。また明倫会という語も明治十七年以後の史料には見られない。もし明倫義塾が廃されたなら、その上部組織である明倫会はどうなったのであろうか。

明治十六年十二月に後藤が明倫会麗沢館の管事となったころより、大分明倫会の麗沢館掌握に不満を抱いていたメンバーがおり[29]、塾長の小川弘蔵も、平塚とそりが合わず、また平塚が月給を滞らすようことがあったため、明倫会を脱会して自ら塾を経営することを考え、「明倫会に入り政党に籠絡せらるゝは我輩の本旨に非ず」という理由を立てて明倫会を退会したのが、明治十七年二月二十七日のことであった[30]。そして退塾後、小川は新たに明倫学会を組織したと推定できる。明倫学会という語は、「毛利文書」と広池の回顧録の中にあり、広池の回顧録には「明倫学会は我が県下有志好学の士の相集りし純粋の学会なり、今小川先生は元来本会の会員に列し、副会長兼学校の教育の任を担当し」[31]と記されており、小川が明倫学会の副会長となっていることが判る。紫溟会と紫溟学会とが、「学」の字一字が加わっただけで性格を異にする面を持っているように、この明倫会と明倫学会も性格を異にしていた。「毛利文書」中の「明倫学会ヲ組織スル趣意書」[32]という文書には以下のように記されている。少し長くなるが全文掲載した。

人ノ人為ル所以ハ何ソヤ、徳性ノミ矣、徳性内ニ涵養シテ忠孝外ニ著ル、其極効四海ニ光輝シ神明ニ通シ以テ天地ニ参シテ人道此ニ於テ乎尽セリ、是ヲ以テ先王孝ヲ以テ天下ヲ治メ、之ヲ躬行心徳ノ余リニ本ツケ人倫日用ノ間ニ施シ、真誠惻怛ノ心ヲ以テ簡易広大ノ治救ヲ敷ク、

其君民相愛シ相戴クノ情融結凝聚シテ仁トナリ忠トナリ、神器上ニ尊シテ風俗下ニ正シク、之ヲ無窮ニ維持シテ西洋各国ノ称慕欽羨スル所トナルハ復贅スルヲ待タサルナリ。

抑我邦ノ治教タル未タ嘗テ二途ニ出ス、其邦ヲ為ムルノ大教大法、自ラ臣民ノ正路トナリ歴朝相受ケ、時ニ盛衰無キ能ハスト雖モ、之ヲ要スルニ政中教ヲ寓スルノ意ヲ失ハス、豈ニ西洋各国ノ教化ハ自ラ教化ニシテ政治ハ自ラ政治ナル者ノ若ナランヤ、蓋彼レ其国ヲ為ス功利理論ニ出ルノ故ヲ以テ、其風教ノ設ニ至テハ之ヲ宗教家ニ一任セサルヲ得サルナリ、素ヨリ上下相愛スルノ情ニ乏シク民心亦従テ詭激ニ馳セ共和政治トナリ君民同治トナリ、其勢焔遂ニ功利理論ヲ以テ人ノ国ニ及サント欲スル久シ、維新ノ始ニ当テ彼レ草昧ノ時ヲ幸トシ詭激ノ説ヲ以テ我カ正道ヲ破壊セント欲スルノ意蓋小ナラス、軽躁好奇ノ徒或ハ横斜迂回傍蹊曲径ニ賺入スル者、奔々蕩々トシテ流テ帰ル能ハス、其ノ学術国家ヲ誤ルノ甚シキ幾ト日月ヲ隠翳シ風俗ヲ頽壊ス、愈壊レテ愈遠シ、有志ノ士将其陥溺ヲ救フテ文明ノ妨礙ヲ除カサル可ケンヤ、此明倫会政党ヲ編スル所以ニシテ万已ムヲ得サルニ免レス、水ヲ道クニ術アリ、其流ニ従テ之ヲ行ル、人ヲ教ルニ方アリ、其固有ニ従テ之ヲ誘ク、教道ヲ得レハ民ノ善ニ従フヤ然リ、易ソ父ニ事ルニ在テハ孝トナリ君ニ事ルニ在テハ忠トナリ、自ラ傍蹊曲径ニ迷フ者有ル無ク、而シテ世道人心ヲ無窮ニ維持スル所以ノ者亦甚難カラサルナリ。

会員ハ既ニ此ニ見ル有リテ、政党ヲ改テ学会ト為セハ、必ス心ヲ愛公和平ニ存シ、大ニ文学ヲ興隆シ忠孝仁義ヲ以テ臣民ノ心腹ニ鞏固ナラシメ、其徳性ヲ涵養シテ以テ文明ノ布置ヲ匡翼賛成セハ、幾希ハ大倫無窮ニ正シク人道全ヲ得天地日月少ク陰翳無シテ、彼功利理論我カ正道ヲ乱ル能ハサルニ至ラン。

以上述フル所ハ、政党ヲ改テ学会ヲ興ス所以ノ主旨ニシテ、其学会組織方法ノ若キハ別ニ規則書ヲ編シテ以テ之ヲ示ス、四方有志者学会ノ趣旨ニ同シテ之ヲ賛成スル者アラハ、来テ此ノ会ヲ大ニセンコトヲ切ニ望ム所ナリ。

政党を改めて学会とすれば、人を愛し平和を愛するようになり、また文学を興隆し忠孝仁義の心を扶植し、徳性を涵養して文明の進歩に役立つという学会への改組の理由が記されている。また「明倫学会仮規則」[33]では第一条に「本会ハ文学ヲ興起シ専ハラ教育ヲ務メテ徳性ヲ養生スルヲ旨趣トス」、第二条に事業として「学校、講談、報告」を行なうことが記されている。[34]

『大分県史近代篇Ⅰ』にある明倫会は明倫学会を政社化したものという記述は逆ではないだろうか。

なお「明倫会仮規則」は「斯文学会規則」と似ていることが注目される。それは、明治十六年十一月に、斯文学会副会長の谷干城が長崎県出張の帰りに大分県に寄り毛利空桑と面会しており、[35]このとき斯文学会および中央の政情について話が及んだと考えられるからである。後日、毛利は谷に宛て、「御設為しの斯文会御規則書御差支之無くば御授与下され度く存じ候。敝邑遠邇交遊幷に門生私塾を開く者多からずとなさず、到儀既に耄及ばすなから貴意道徳御振挙の御勢力万分一を増加仕度き拙誠に御座候」と、斯文学会の規則書を頒けてくれるよう頼み、谷の意図を受けて努力することを伝えている。[36]

谷の毛利訪問(十六年十一月)、紫溟会の学会への組織がえ(十七年三月)、および明倫会麗沢館の内紛(十七年二月)と明倫学会の成立の三つの事件が、同時期に起こったことは偶然ではなかろう。平塚や後藤にしてみれば、政党を組織して一年もたっておらず、政党を学会に改めることにためらいを感じたのかも知れない。なぜなら麗沢館を再び明倫会から独立させ明倫学会を組織した小川に対して、「明倫会より先生〔小川〕を破会するといいまた和睦するといい、誠に曖昧然として」[37]決することができなかったところにそれが窺われよう。もっともこのあたりは推測が交じっており、「明倫学会ヲ組織スル趣意書」を誰がいつ記したかを示すものがないため、後藤と小川と明倫学会との関係がいま一つ十分に立証されないが、いずれにしても以上の事件により明倫会も明倫会の経営する塾も明治十七年には消滅した。麗沢館がその後どうなったかは知る由もないが、明治十九年三月九日には大分県勢家町より大分一一九〇番地への移転届が出され、明治二十年一月十九日には廃校届が提出されているところを見ると衰退に向かったと言えよう。[38]

四、大分斯文学会の成立

『鶴崎市史人物篇』の後藤の項では、明倫義塾が廃され斯文学会が設立されたことが記されていることは既に述べた。[39]また『大分県政党史』には、西村亮吉県令や平塚恰等が豊州立憲改進党撲滅のため、増川蚶雄や合志林蔵に「名を育英に託して斯文学校を創立」させたと記されている。[40]先述した明倫会と明倫会麗沢館との関係より、大分斯文学会と大分斯文学校にも同様

な関係があると類推される。事実先述の「明倫会関係書類」の中に「私立明倫規則」があり、またこれとは別に「私立明倫校規則・私立斯文学校規則」という文書が遺されているが、[41]その三つの規則は同じ筆者によって記されたと見ることのできるもので、「私立斯文学校規則」は「私立明倫校規則」を修正したものである。これより明倫校と斯文学校は同様の趣旨によって設立され、明倫校をつぐものが大分斯文学校であったと位置づけることができる。しかし規則の前文には若干違いがあり、「私立斯文学校規則」では「本校ハ小学ノ科程ヲ卒エシ者ノ為ニ和漢ノ文ヲ講シ、兼テ欧米ノ学ニ渉リ、徳性ヲ修メ知識ヲ広メ人傑ヲ陶成シテ邦家ノ実益ヲ裨補セン事ヲ計ル所トス」と、「私立明倫校規則」にあった本科と別科の区別規定がなく中等教育のみが目ざされている。これは明治十八年八月の教育令改正によって師範学校卒業資格学力検定試験制度が廃止された影響と考えられる。[42]

ところで、東京に斯文学会という漢文学会があった。[43]斯文学会は明治十三年六月に発会式を挙げたもので、「実践ノ学経国ノ文ヲ棄テ之ヲ土芥視スルニ至」った風潮を批判し「此道ヲ振張シ斯文ヲ興隆シ以テ時弊ヲ匡済セントス」と開設告文に記されているように、漢文学を再び興すことにより「固有ノ美」「道徳仁義」に基づく秩序ある社会を作ることをめざそうとするもので、具体的には講説・学校経営・雑誌発行によってそれを行なおうとしていた。この斯文学会は各地に支部を持ち、たとえば熊本、広島、長崎、桐生、北総、北越の支部が確認できる。会長は有栖川熾仁親王、副会長は谷干城で、実際には谷が中心となり活動しており、十五年一月の時点では全国各地にわたって千五百名余りの会員がいた。発会よりしばらくの間は講説と雑誌発行を主に行なっていたが、明治十六年一月斯文黌規則を再発行し、本格的に漢学校設立に向けて動き始めた。「斯文黌設立見込書」には「学校ハ当分漢学専門学校」とすること、「本黌ノ主旨ハ礼儀廉恥ノ道ヲ講習シテ国家ノ元気精神ヲ振作スルニ在ル事」が記され、二月には明治政府の教育方針の原典となった『幼学綱要』を下賜せられ、四月には宮内省より以後十年間毎年二千四百円下賜されることが決定(済々黌も明治十六年五月に恩賜金五百円を下賜されていることが想起される)されている。谷が校長事務代理となり、宮内省御用邸を校舎として八月二十一日に開校授業が開始された。[44]斯文学会の支部も斯文黌にならー

って学校を設立し、たとえば明治二十年四月十二日には北総斯文学会によって北総斯文黌が創設されている。斯文黌の雰囲気について「斯文黌は単に漢学者を造るのみが目的では無く、国士を造るといふのが主眼であったから、〔中略〕谷会長を始めとして諸講師の方々も、講義に講演に、努めて士気を鼓舞し節義を重んずるやう誘導せられたので、生徒もまた国士を気取る者が多かったという」[45]。

さて、大分に話を戻して、平塚恰は明治十七年八月上京し、斯文学会と大分に支部を設けることについて相談した。帰京した平塚は組織にさっそく取りかかり、後藤や南方実、陶山直良、荒木歓吉、吉野千尋らを中心に大分新報社を事務所として八月十二日に大分斯文学会を設立させた。「大分斯文学会規則」第一条の「主旨」の項には「本会ハ斯文学会ノ支会タルヲ以テ、其本旨ニ基キ文学ヲ興隆シ専ハラ教育ヲ務メテ徳性ヲ養成スルヲ趣意トス」として、事業として「学校、講説、報告」を挙げている。九月には浄安寺で発起人集会を催し「大分斯文学会細則」を定め、十月に委員選挙を行ない、十一月には荷揚町に事務所を移し、翌十八年一月十七日に発会式を挙げた[46]。三月には小会が北海部郡に[47]、十月には臼杵に、次いで日田、日出、佐伯に設置されている[48]。明治十九年三月までに会員は九二八名確認できる[49]。また発会一年目の十九年一月十七日の総会において、西村亮吉県令が会長に、山川景範が副会長に選ばれている[50]。

大分斯文学校は、明治十八年七月に設立に着手され[51]、十九年三月十日に設置願いを提出し、三月十五日より生徒の入学を許し、四月四日に開校式典が行なわれた[52]。校長は県学務課属の桑原平八で、教員は師範学校および尋常中学校の教諭が無報酬で本務の余暇に携わった[53]。教員の中心的存在であった増川蚶雄は毛利空桑の弟子の一人であった[54]。正式に決定された「大分斯文学校規則」[55]第一条によれば、「忠孝彝倫ノ道ニ基キ、和漢文ヲ講シ兼テ欧米ノ学ニ渉リ、徳性ヲ涵養シ智識ヲ研磨シ以テ邦家ニ裨益センコトヲ計ル」ことを目的とし、修身・和漢文・英語・算術・代数・幾何・図画・地理・歴史・物理・体操の十一教科の中学程度の普通教育を授け、修業年限は三年間六級であった。学校の特長については「該校管理法は殆んど師範学校に倣ひ、団長什長伍長等の役員を設け、起臥飲食より喫烟飲湯の事に至るまで総て規律を立て、其厳粛なる公立学校にもおさ〳〵

譲らさるに由り益す〳〵父兄の信用を得、客月開業以来新たに入学を申し込みし者二十四、五名の多きに及ひしと云ふ」[56]と記されているように規律を重んじたものであった。また済々黌と同様に特に兵式体操には力を入れたらしく、世間では「斯文学校ハ兵隊ノ下稽古ヲ数ユルナリ、徴兵ノ準備ヲナスナリト」という批判もあったが、ある教師が「夫レ順良、威重、親愛ノ三徳ハ人間一日モ欠ク可ラサルモノニシテ、能ク之ヲ陶冶鍛錬スルモノハ兵式ニ若クモノハ莫シト已ニ文部省ニ於テ是認セラルル所ナリ。〔中略〕本校モ亦其旨意ヲ奉シテ之ヲ実施セシ所以ナリ」と語っていることが象徴的であるように国家主義教育を施すものであった。[57]

おわりに

大分県の大同団結運動の中心人物であった佐藤蔵太郎は、明治二十二年に往事を回顧して次のように述べている。[58]

実ニ始ハ脱兎ノ如ク、終ハ処女ノ如シトハ真ニ君等ノ一派ヲ謂フカ、試ニ首ヲ回ラシテ六七年前ノ往事ヲ懐エ、明治十六、七年頃ノ景光ヲ思エ、〔中略〕我カ大分県ノ樹モ茅モ靡然君等カ威風ノ凛々タルニ吹キ敷カレサルハ無カリシナリ。圧倒蹂躙尚饗カズ余威文ヲ学ブノ学校ヲ起シ……武ヲ講ズルノ協会ヲ設ケ、天晴レ熊本某派ノ外粧ハ兀トシテ我カ大分ノ中央ニ現ハレタルニ非ズヤ……、〔中略〕墓ナキモノハ浮世ナリ、斯文学校ハ五裂シテ跡ナク、頼メヌモノハ人事ナリ、武揚協会モ不用ニ属セリ、〔中略〕人倫ヲ明カニシ公道ヲ正フシ忠君愛国ノ至誠ヲ奮フテ帝国ノ安寧ヲ千歳ニ保護スヘシト誓フタルノ精神ハ今何ノ辺ニカアル。

つまり、佐藤は帝政派の運動が、明治十六年・七年ころから斯文学校や武揚協会などを隠れ蓑として、官吏や教員を組織化して活発に行なわれていたことを説明しているのである。そして、斯文学校の設立母胎である斯文学会は、帝政党系の政党明倫会を引きつぐものであった。同時代を生きた広池が「回顧すれば明治十三、四年の前后には、政党頻りに流行して田舎のごときも教員書生はもちろん、少しく文字を読むものはみな自由改進の諸党に入り、ただ囂々と湧き立つるのみなりしが、人の思

想忽ち変じ、明治十六年の頃よりは、政党頻りに解散して学会頻りに起こり、小学、中学には修身科を加えて実着を導き、天下靡然として漢学の実着主義を持ち出し、政談は生意気なりというごとくなりし」[59]と述べているように、そのような政党から学会への転換は時代の潮流に従っていたものなのである。

明治十年代後半における大分県の帝政派の運動は、大分斯文学会＝大分斯文学校という漢文学会を一つの活動拠点として行なわれていた。そしてこれは、大分だけの現象ではなく、熊本の紫溟学会と済々黌との関係にも見られる現象であり、さらに東京における斯文学会と斯文黌という漢文学会と漢文学校という組み合わせを模範としていたのである。

ところで、これらの運動はその後どうなったのであろうか。東京の斯文学会は、明治二十年五月に支部の一つ北越斯文学会が閉会されているが、このころよりだんだん活動が停滞していったようで、二十年七月に斯文黌が火事により閉校、二十一年二月をもって廃校されている。その後、講義と雑誌発行を細々と続け、大正七年にいくつかの同主義の団体と合併して現在の斯文会となっている。

大分斯文学校も二十年十一月の記事を最後にその姿は見えない。[60]その記事には、大分斯文学校には百名余りの生徒がおり、管理が行き届き規律も厳正で生徒の指導にも成功しているが、大分斯文学会の維持が困難のため、有志者の援助によって校名を変え存続させる方針が決定されたことが記されている。実際、尋常師範学校を退職した増川蚶雄がこれを引受け「斯道学校」と改称したが、まもなく二十五年には閉鎖されている。[61]大分斯文学会も、その閉会の時期を確定する史料はないが、明治二十年ころに活動を停止したと考えてよさそうである。

「その後大分県政界は大同団結運動の波が波及してくるまでは比較的穏やかであり、明治十六・十七年ころからの帝政派の優勢という情況も消滅して行ったと見ることができよう。明治二十二年にいち早く改進党の運動を再開した佐藤蔵太郎は、『大分現状秋夜之感慨』を著し、この政治的に活性化を失った大分政界を再活性化させようとし、特に「改進党ニ反対スルノ意見アラバ、抵抗スルノ覚悟アラバ、ナド速カニ其主義ヲ表明セザルゾ」[62]と記し、前述した明治十六・七年ころから帝政派の全盛

時代の情況を述べて反対勢力を挑発しているのである。その挑発に応じて豊州会が組織されていくということを記して結びとしたい。

【註　記】

(1) 野田秋生「紫溟会・明倫会・豊州会――大分県『保守党』の系譜(1)――」『大分県地方史』第一一八号、昭和六十年。

(2) 本稿は、明治十年代における帝政派と漢文学界との関係についての研究の一環である。

(3) 高木俊輔「立憲帝政党関係覚え書」『歴史学研究』三四四号、一九六九。

(4) 大分県の自由民権運動については、長野潔『大分県政党史』豊州新報社、大正十五年、野田秋生「政社から政党へ――大分県の自由民権運動覚書――」『大分県地方史』第一〇六・一〇七号、昭和五十七年、および同「自由民権期の『地方自治』論――大分県民会・初期県会における――」『大分県地方史』第一一〇・一一三号、昭和五十八・五十九年、『大分県史近代篇I』二三六～二七五頁、昭和五十九年などが参考となる。

(5) 高木前掲書五五～五六頁。なおこの時の後藤の京都行きのメモが大分県立図書館に残されている。

(6) 野田「紫溟会・明倫会・豊州会」。野田氏のあげた史料の他にも明倫会の語の載っている史料はあり、たとえば「地方巡察使復命書」には「明倫会ナルモノアリ、現今其組織ニ従事ス。皆春郡平民後藤田鶴雄、竹田士族小泉潔等ノ主唱ニ係リ、従来勤王愛国者ヲ以テ称セラレタル鶴崎士族毛利至等ハ之ニ応シ、目下会員二百余名、専ラ道徳ヲ明ニシ軽躁ヲ矯ルヲ以テ目的トナスト云フ」（我部政男編『明治十五年明治十六年地方巡察使復命書』三一書房、上巻七五七頁、一九八一）と記されている。引用文には適宜句読点を加えた、以下同じ。

(7) 「明倫会関係書類」大分県立大分図書館蔵。

(8) 久多羅木儀一郎『鶴崎市史人物篇』四二九頁、鶴崎市役所、昭和三十二年。

(9) 『大分県政党史』二六四頁。

(10) 『大分新報』は明治十六年二月に発刊され、社長平塚怡、活版局長遠近武則、新聞局長後藤であった（『大分県史近代篇I』二六六頁

および『大分新報社規則』仮規則による）。なお『大分県史近代篇Ⅰ』五〇三頁では十六年十二月としているが二月が正しい。

(11) 前掲「明倫会関係書類」。

(12) 野田「紫溟会・明倫会・豊州会」五頁。

(13) 前掲「明倫会関係書類」の内。明倫会が設立されてからそう離れた時期に書かれたものではないと考えられる。

(14) 「空桑毛利先生言行」毛利空桑文書リール19、毛利空桑記念館蔵（大分市教育委員会管理、以下「毛利文書」と略す）。筆者は国立国会図書館憲政資料室蔵の同文書のマイクロフィルム版を使用した。なお「毛利空桑文書」は空桑だけでなく、その子供である毛利登や毛利莫関係のものや、空桑死後編纂された文書も含まれている。この文書と次の文書は莫が後年記したものと推定される。

(15) 「空桑毛利先生言行略」大正四年四月、「毛利文書」リール17。

(16) 註13に同じ。

(17) モラロジー研究所編『広池千九郎日記』第一巻、一〇～一一頁、広池学園出版部、昭和六十年。広池は『中津歴史』の著者、のち法学博士。

(18) 『明治十九年度大分県臨時会日誌並決議録』、『明治二十年度大分県通常会日誌』合巻上、大分県立大分図書館蔵。

(19) 毛利空桑著・毛利弘訳『川上紀行』九頁、毛利弘、昭和五十六年。なお小川は明治十六年七月三日空桑に宛てて、「嚮平塚君深憂時勢、薄人倫廃弛、聚有志輩於大分県下某寺、開明倫社、皇張人倫以欲攻破民権党、僕聞先生来臨即不俟賀行、先生以足痛不来書、明倫二大字被贈、拝読之余綴拙文為以序、却汚先生之清鑑」という書簡を送っている（「莫先生宛明治十二、三年空桑先生書簡」の内、「毛利文書」リール19）。

(20) 十時英司編『毛利空桑全集』昭和九年所収の門人表。久多羅木前掲書四二九頁には、小川が後藤に贈った詩が掲載されている。また小川弘蔵『漫遊紀行』明治十四年には空桑が序文を書いている。

(21) 瀬戸衛『小川含章先生の御偉業と現代的意義』昭和五十一年、勝光寺麗沢館顕彰碑除幕式記念、八～九頁。

(22) 以下の熊本県と高知県の事例は次に掲げる文献を参照した。本山幸彦『近代日本の政治と宗教』ミネルヴァ書房、一九七二、特に第二

章「明治前期の地方政治と中等教育の展開」および第三章「国家主義運動と教育活動」。水野公寿「明治憲法体制成立期の反民党勢力」『日本史研究』第二一一号、一九八〇。同「反民権政社の成立と展開」（津田秀夫編『近世国家の解体と近代』、塙書房、一九七九所収）。大日方純夫「保守主義と民権運動」『歴史公論』一九八一年九月号。熊本県と大分県との関係については、毛利空桑の存在と、紫溟会の重要なメンバーであり井上毅とも深いつながりのあった古庄嘉門が明治十九年より大分県書記官として赴任して来たことが注目される。

(23) 佐々友房「済々黌歴史」（『済々黌百年史』昭和五十一年所収）。

(24) 「政党を変じて学会となす理由」『楳渓津田先生伝纂』一九三～一九五頁、昭和八年。

(25) 「紫溟学会設立の趣旨」同前一九〇～一九三頁。

(26) 佐藤蔵太郎『大分現状秋夜之感慨』四六頁、明治二十二年。

(27) 毛利空桑の弟明甫の長男（久多羅木前掲書三六〇頁）。

(28) 久多羅木前掲書四二九～四三〇頁。

(29) 広池も「麗沢館劣生千九郎、憤本塾監事之近状……」という長い題名の漢詩を残しており、それを不満に思っていた（広池千九郎遺稿）。

(30) 『広池千九郎日記』第一巻一一～一二頁。

(31) 同前一五頁。広池は、さらに明治十七年六月にこの明倫学会も脱会している。この経緯は拙稿「自由民権運動期の広池千九郎」『モラロジー研究』第二二号、一九八六に書いておいた。

(32) 「明倫学会ヲ組織スル趣意書」（「空桑毛利先生言行」坤の内）「毛利文書」リール19。同文書中の「明倫政党を編する所以にして万己むを得さる」というところは紫溟学会の「政党を変じて学会となすの理由」を想起させるものである。

(33) 「明倫学会ヲ組織スル趣意書」に付されている。

(34) 『大分県史近代篇Ⅰ』二七三頁。

(35) 「空桑毛利先生遺事抜粋」「毛利文書」リール19および「東京日々新聞」明治十六年十一月十六日・二十四日の記事より推定した。

(36) 毛利弘『毛利空桑書簡集』（上）二一七～二一八頁、昭和四十二年。

(37) 『広池千九郎日記』第一巻一二頁。

(38) 「諸届書、明治十九年」、「諸届書、明治二十年」大分県行政文書の内。

(39) 久多羅木前掲書四二九～四三〇頁。

(40) 『大分県政党史』二六五頁。

(41) 「私立明倫校規則・私立斯文学校規則」大分県立大分図書館蔵。

(42) したがって『大分県教育百年史』第一巻五八六頁、昭和五十一年や『大分県史近代篇Ⅱ』四七〇頁、昭和六十一年などに記されている本科と別科に分かれていたという記述は誤り。事実、「大分斯文学校規則」（『大分斯文学会報告』第九回付録、明治十九年四月）にはその区別が記されていない。

(43) 斯文学会、斯文黌関係の記述は、『斯文学会規則』、『斯文黌建設趣意書』、『斯文学会首唱者姓名録』、『斯文学会報告書』第一号～第二〇号・二四号・二七号・三二号・三三号（明治十四年～二十二年）、山本邦彦「斯文学会時代の回顧」『斯文』第八巻第四号～第一巻第一号（大正十五年～昭和四年）などによる。

(44) この動きは学習院改革とも関連していたようで、明治十七年四月十七日、学習院は宮内省の管轄となり、皇室の藩屏としての位置を明確にせられ、五月二十四日には谷が学習院長に就任している。

(45) 小野田亮正「旧斯文黌雑話」(九) 『斯文』第一三巻第三号四〇頁、昭和六年。

(46) 『大分県斯文学会報告』第一回、明治十八年八月おおよび『大分県共立教育会雑誌』第一号二四頁、明治十八年一月。『大分斯文学会報告』は第二二回まで発行されていることが『斯文学会報告書』第三二号（『斯文学会雑誌』第一号、明治二十二年付録）より判明するが、筆者の見ることのできたものは第九回までである。

(47) 「大分斯文学会関係書類」大分県立大分図書館蔵。

(48) 『大分斯文学会報告』第四回・七回・八回、明治十八年十一月、十九年二月、三月。
(49) 『大分斯文学会報告』第二回～第八回の会員名簿より集計。
(50) 『大分斯文学会報告』第六回、明治十九年一月。この時選ばれた会幹は、平塚恰、後藤田鶴雄、西川清一、淵野勝也、深尾健、陶山直良、甲斐喜一郎、吉野千尋、出事、井上栄彦。
(51) 『大分斯文学会報告』第一回。
(52) 『大分斯文学会報告』第七回・第八回・第九回。
(53) 『大分県共立教育会雑誌』第十三号四七頁、明治十九年三月。
(54) 首藤親人『空桑先生言行録』一頁、昭和三十三年。
(55) 『大分斯文学会報告』第九回付録。
(56) 『大分県共立教育会雑誌』第二十一号五四頁、明治十九年十一月。
(57) 『大分県教育百年史』第一巻五八七頁。
(58) 佐藤前掲書四一～四二頁。
(59) 『広池千九郎日記』第一巻三三頁。
(60) 『大分県共立教育雑誌』第三十三号二二頁および第三十四号一七～一八頁、明治二十年十一月。『大分斯文学会報告』は一ケ月に一回発行されているから、第二二回の発行は明治二十年五月の計算となる。以後報告は出されなかったと考えられる。
(61) 『大分県教育百年史』第一巻五六七頁。増川は明治二十年八月十五日付で師範学校の退職届を提出している（「諸届書、明治二十年」大分県行政文書の内）。
(62) 佐藤前掲書四〇頁。

（麗澤大学講師 [redacted]）